

高校生の進路選択に関する教育臨床学的研究 (2)

— 進路形成過程における転機の存在とジェンダーの影響 —

○酒井 朗 (お茶の水女子大学) ○千葉勝吾 (東京都立市ヶ谷商業高校)
○広崎純子 (早稲田大学) 齋藤玲奈 (東京大学大学院)

1 研究の目的

昨年度本学会大会では、A商業高校での進路選択支援活動について報告し、進路多様校に通う生徒の進路選択にみる「ゆらぎ」の存在と、そうした生徒への支援のあり方について検討した。本報告では前回の報告をふまえ、進路選択における転機の存在にスポットを当て、そこからジェンダーと教育という教育社会学の中心的テーマの1つに対し、新たな視点を提起したい。

昨年度の報告では女子の事例のみを取り上げたため、ジェンダーと進路に関する考察は今後の課題として残された。だが、その後男子生徒の参加が増え、この点への分析が可能になると、進路選択における転機の存在がジェンダーにより構造化されていることを理解するに至った。本報告はこの点について具体例を報告するとともに、その理論的な意味合いを考察するものである。

転機の問題はデンジン (1992) により「エピファニー体験」としてライフストーリー論の中心課題の1つとして提起されてきた。ただし彼の言うエピファニーでは、虐待やアルコール中毒などの問題状況において発生するものが想定されており、必ずしもここでいう転機と同質のものではない。進路選択における転機とは、氏が想定するほど激烈な経験とは言えないまでも、生徒のそれまでの進路展望や動機付けの度合いが大きく変わるような何らかの経験を意味している。このような意味での転機はトラッキングシステムの下にある高校生の進路選択では十分生じることが予想される。なぜなら、各トラックに予定された進路から大きく逸脱して進路を選択することは、きわめて鮮烈な選択として意識されるし、そこでは様々な物事の意味変容が生じるものと思われるからである。

だが我々の支援活動では、進路選択においてこうした転機が明確に見られたのはもっぱら女子であった。反対に活動に参加した男子には転機があまりはっきりとは経験されなかった。女子は多くの場合ある時点から意識の変容をはっきりした形で自覚し、大学進学に向けて、それ以前とは異なった度合いで努力しようとしたが、男子にはそうした転換点は見られなかった。

このことは高校生の進路選択における転機の存

在がジェンダーによって構造化されていることを示唆するものであり、それは1つの社会的事実として社会学的に説明すべき事象である。果たして、なぜ転機の経験のされ方に男女で違いが見られるのだろうか。本報告ではこのような問題関心のもとに、具体的には以下の種々の問いに答えることを通じて考察を深めていきたい。

(1) 転機を経験した生徒達は、支援の取り組みの中で転機としてどのような状況に遭遇し、それをどう受け止め、どう対処したのか。

(2) その前後において、支援にあたった我々はいかなる影響を与えたのか。

(3) その中で、生徒たちは自分が何者であるのか、あり得るのかについて、どのように思いを巡らしたのか。

(4) 転機の存在が明確な形でみられない生徒はどのようにして進路を選択していったのか。

(5) 転機の存在がみられる生徒とそうではない生徒の違いは何によるのか。そこにはジェンダーという要因はいかなる形で介在しているのか。

2 「ジェンダーと教育」研究における転機問題の重要性

「ジェンダーと教育」の問題は、多くの教育社会学者がとりあげてきた問題である。そこでは、女性がなぜ女性向きの進路を選択していくのかといったジェンダートラックの問題が取り上げられてきた (中西 1998)。女性が伝統的な女性性を内面化していく理由について、たとえば木村 (1992) は、虚偽意識仮説、合理的選択仮説、適合理化仮説、の3つを挙げている。こうした一連の研究は、女性がなぜ低位の進路に甘んじるのかという問題設定を立ててきたが、我々がA商業高校での進路選択支援活動で見いだしたのは、むしろいったん進学を決めた場合には、女子生徒の方がアスピレーション (文字通りの野心) が高く、努力の度合いも高い場合が見られることである。

こうした事象を「ジェンダーと教育」研究はこれまで対象とすることはなかった。先行研究では当該トラックに予定された進路をそれぞれの性の生徒がどのようにして選択するのかの説明されてきたのであり、そこから逸脱するケースは看過されてきた。だが、先に述べたように、逸脱事例に

においてもまたジェンダーによる構造化が見られるのであればそれは説明されるべき事象であろう。

しかも逸脱事例の研究は、しばしば先行研究の前提となる議論に対して異議を申し立てる。今回の事例を通じて痛感されるのは、先行研究が社会化論に過度に依拠してきたのではないかという問題である。女子は女子向けの進路に就くことが想定され、それが説明の対象とされてきた。だが、女子が取って女子向けの進路を選ばない場合にもそこにはジェンダーの要因が介在している。とするならば、ジェンダーはいかなる要因として、そこに介在するのだろうか。本報告はこの点について理論的に検討することも課題の1つである。

3 プロジェクトの概要

(1) A商業高校について

A商は、首都圏都市部にある全日制公立高校で、1学年4クラスの小規模校である。入試のレベルは下位校の1校で、普通科の最下位校とどちらにするか迷って入学してくる生徒も多い。本研究の主な対象とした2004年3月の卒業生は入学時点では160名であったが卒業生は105名で、男女比は約1対4である。

(2) 進路状況と課題

A商はいわゆる進路多様校であり、卒業生に占める就職内定者の減少傾向が続き、2003年3月の就職内定者数は過去最低の23名(19%)であった。これに対して進学者は横ばいであり、したがって、進路未定者が増加した。この状況に危機感を持った学校は2004年度、進路指導部と3学年担任が中心となって個別指導を徹底する改善に乗り出した。その結果、2004年3月の卒業生の就職内定者は43名(33%)となり未定者も減少した。

大学進学についても、2003年3月の進学者数5名に対して2004年3月の進学者数は11名で初めて10%を越えた。また、本研究にかかわる支援プロジェクトについて3学年担任との打ち合わせもおこなわれ、活動としての認知度を深めた。

課題としては、全体指導・個別指導を繰り返しても卒業の時点で、進路未定の者がでることと、決定した者でも就職活動、進学準備に取り掛かる時期が遅いことが、教員のインフォーマルインタビューにおいて指摘されている。また、女子に比べて男子に未定者や意識の低い者が多いということも指摘されている。

(3) プロジェクトのねらいと運営方法

本プロジェクトは昨年度に報告したように、学校のスケジュールで進路選択をおこなうのではなく生徒自身のペースで大学進学を中心とした進路

選択をおこなうこと支援するものである。具体的には、毎週2、3日放課後に大学生、大学院生がA商を訪問し、進路選択の相談や学習支援・試験対策支援を、希望する生徒に対しておこなうもので、以下の項目をねらいとしている。

- ・ 大学生の実態を肌身で感じる。
- ・ 進路にむけての時間を共有する。
- ・ 自宅学習にチャレンジすることを支援する。
- ・ 入試情報の検索と願書・提出資料の書き方や内容づくりを支援する。

(4) 参加生徒の状況

プロジェクトへの参加はオープンであり、授業、プリント、掲示を通じて誰でも大学生・大学院生に相談できることがアナウンスされていたが、実際には教員に個別相談をしたところ大学進学を勧められた生徒と、教員の側から大学進学を進路先として提示された生徒が参加している。したがって本研究でフィールドワークの対象となった生徒は全員が始めたきっかけを「教員に勧められて」と述べている。

しかしながら、本年度は昨年までと異なり一応は大学進学という志望を持っている者が多かった。

(5) とりあげたケースの概要

2004年3月に卒業した生徒5名と、2003年3月に卒業した生徒2名について報告する。氏名はいずれも仮名である。なお、ケース3,4,7については、紙幅の都合上、当日配布資料に記載する。

表1 ケースの概要

	氏名	性別	出席状況・成績	参加前の進路志望
1	カズミ	女	欠席少・遅刻少、成績優秀	専門学校
2	*リエ	女	欠席少・遅刻多、成績普通	就職
3	*チル	女	欠席多・遅刻多、成績悪い	フリーター
4	レイコ	女	欠席少・遅刻多、成績普通	専門学校か大学
5	マコト	男	欠席多・遅刻多、成績悪い	大学
6	ユウスケ	男	欠席多・遅刻多、成績悪い	フリーターかな
7	ヒロシ	男	欠席無・遅刻少、成績優秀	大学だが経済的に就職かも

* 2003年3月卒業の生徒

4 チャレンジャーの女子

昨年度の報告で指摘したように、A商の生徒の中には学校に対する帰属意識が低く、最も小さな

努力だけで卒業さえできればいいという意識が強い生徒も少なからずおり、卒業後フリーターになるのもしかたがないという暗黙の了解が教員生徒間で共有されている。女子生徒の中には、「卒業したら結婚」と考えている生徒も一定数おり、また、家庭の経済的な事情などがある場合には「卒業後はキャバクラで働く」と公言する生徒もいる。本プロジェクトでは、そのような生徒たちに対し、大学進学に向けて努力するという価値を積極的に提示しながら、進路選択支援活動をおこなってきた。つまり、女性役割に応じた進路選択をしようとする生徒たちに対し、揺さぶりをかける活動であると言えよう。

先述のようにA商の生徒の男女比は1対4であるが、大学進学を勧められ本活動に参加した生徒の男女の数はほぼ拮抗している。だが、後述のように、男子の場合は、成績・出席・試験日程などの条件に鑑み、自己に見合った選択をするケースが多いのに対し、女子の場合、「チャレンジャー」とも呼べるような無謀な進路（当初は教員から勧められたものである）に果敢に挑み、それに向けて主体的に努力をするという姿勢が見られた。

ここでは、当初は受動的であった大学進学に対し、ある時点を転機として能動的に取り組むようになった2名を事例として取り上げる。

（ケース1）カズミ

両親と中学一年の妹の4人暮らし。中学3年時は、あまり登校せず年間出席日数は50日、評定平均は2。担任に、「高校へ行けないから就職考えた方がいい」と言われ、すごくあせって必死に勉強してA商に入学。中学時代は、「散々な落ちこぼれ方をして、授業も全くわかんなくて、だめだなーって感じ」だったのだが、高校入試のための受験勉強が効を奏してか、入学後最初の定期テストで高得点を取ることができ、それ以来、成績は上位を維持し、高校2年時には生徒会長も務めた。高校卒業後の進路について、母親からは、「女の子で商業高校なんだから、どうせお嫁に行くし大学進学しても無駄」、「銀行の仕事がいい」と言われ、入学当初は就職志望だった。

しかし、本活動の支援を受けた先輩がAO入試や自己推薦入試で大学進学を果たすのを見て、「頑張れば（大学にも）行けるのか」と大学進学への憧れも抱くようになる。一方で、好きな絵を続けようと、デザインの専門学校への進学も考えていたが、友人の描いた絵を見て自分の才能のなさを実感し、専門学校でやっていく自信を失くす。

3年に進級した当初は、高卒後すぐ就職し一生働き続けていくという将来にも「ぴんとこない」という理由で、消極的な選択として「情けないんだ

けど進学」を目指すことにした。だが、「7月までは何も決まってるな」という状態だった。

カズミは、本活動に参加し始めた当初から、早稲田大学を自己推薦入試で受験すると言っていた。しかし、志望校の選択は、自分の意志というよりも「B先生と相談して決めた」と語っており、B教諭に勧められるがままの受動的な選択であった。

（合格後、「（今年は自分が早稲田を受けるように言われ）結構憂鬱だった」と語っている。）カズミ自身は社会科学部を受験しなかったのだが、成績が基準に及ばなかったため、教育学部を目指すことになり、「中学にはいい先生がいなかった」「先生にはなりたくなかった」から、「最初は教育は嫌」という気持ちが強く、1学期の間は活動の場に来ても、生徒会の仕事をしたり塾の英語のプリントをしたりして、あまり積極的ではなかった。

また、一方で、進路指導部の進学担当の教員（C教諭）には指定校推薦で大学進学することを勧められており、「（指定校で簡単に入学できたとしても）A商の英語は中学生レベルだから大学に入ってから大変だ」と考え、先走って塾に通い英語の勉強を始めた。カズミは、夏休み中に3回活動に参加しているが、その際にも、塾の夏期講習の宿題や予習をやるが多く、B教諭から課せられていた自己推薦入試受験のための資料作成の作業は捗らなかった。だが、B教諭に「誰についていくのか（C教諭の勧める指定校推薦を受験するのか、B教諭の勧める自己推薦入試を受験するのか）決めろ」と決断を迫られたことをきっかけに、指定校推薦は受験せず、早稲田大学を第一志望とすると決意表明した。

カズミにとっての最大の転機は、ようやく10月にはいつから、願書作成や小論文の練習などを始めた時であった。受験学科を生涯教育専攻にすることに決め、ボランティアとのやりとりの中で、これまでの経験（A商入学後におこなってきた地域在住の高齢者に対するパソコン講習やカンボジアの小学校でのソロバン指導などのボランティア活動）と、将来の夢（好きな簿記を生かしてNPOの会計の仕事に就く）をつなげる勉強を大学でできることを知り、「一気にやる気が出た」という。また、出願書類である活動報告書を作成する過程の中で、ボランティア活動の機会を多く与えられてきたこと、それを通じて多くの人との出会いの機会が得られたこと、大学生・院生やB教諭が応援してくれていることを実感し、「頑張りたいな」と感じたという。一次合格後は、ほぼ毎日のように活動に参加し、専門分野の本を読んだり、かなりの専門性を要求される小論文の過去問題にあきらめずに取り組んだりする姿勢を見せ、その

結果、早稲田大学に合格した。

(ケース2) リエ

両親と弟の4人家族。自営業でそれほど経済的な余裕があるわけではない。進学に関して母親は、多少の無理をすれば出せないこともないが、大学に行ってもどうしてもやりたい勉強があるのでなければ就職したほうが良いと言っている。評定値は3.0。「すごい遅刻が多いので、就職できないなって思ったんですよ、2年生の終わり頃。で、B(教諭)が(「おまえも進学にするか?」)と言ってたから、あー、そうか、進学かって。」就職は無理だからという理由で進学を希望した。3年の5月から塾に通い始めたが、勉強の仕方が分からず、B教諭の勧めで本活動に参加。

活動開始時、進学という方向性は決まっていたものの、なかなか自分から動くことができず、志望校について「自分のことなんだから自分で探さなよ」というボランティアの言葉に対して「そう思うけど、何していいかわからないから何か指示して」と答えるような状態だった。活動の進行とともに、次第に志望校選択にも受験勉強にも積極的になっていき、大学へ行きたいという気持ちが「どんどん強くなっていった感じ」だったという。

しかし一方で学習習慣が身につけておらず、「ちょっと勉強に身が入らなくなってきちゃって、ずっと英語ばかりやって。受験勉強だから多いわけじゃないですか、やるのが。全然できなくて。」という状態になり、「お母さんが、そんな態度なら(塾を)やめれば」と言ったことで塾をやめたりもしている。家計への配慮も常にあり、「おねえちゃんが大学行くなら自分は行かない」という弟の言葉に考え込む様子もみられた。

11月、第一志望の駒澤大学を受験中に国士舘大学の願書を出そうとしたが、「(何校も違う学科を受験して受験料を無駄にして)やりたいことがはっきり決まっていらないなら進学しないほうが良い」「駒沢がダメなら就職しなさい」と両親に言われ、受験料をもらえなかったために出願できなかった。その後、駒沢が不合格となり、本人は進学か就職かで深く悩む。その際、一昨年度に生徒として本活動に参加した先輩と進路について話し合ったことが、リエにとって転機となった。この時、先輩に「働きたいかもう少し勉強したいか」と聞かれ「高校に入った時、中学で勉強しとけばよかったって思った」「(大学では、大学を)卒業した時に後悔しないように、勉強しとけばよかったと思わないように、勉強したい」と思ったという。また先輩から、「私みたいに二部にして、学費半分だし、昼間働けるから、親に負担かけないために。本当にいきたいんだったら、ちょっと考え

てみな」と言われ、両親にそれほど経済的負担をかけずに進学する道もあることを知り、それまで考えていなかった二部の受験を決心する。父親に「これを最後に受験させてください」と頼み込み、受験までの日程も差し迫っていたのだが、願書(志望動機)の作成、面接の練習、小論文の練習などに前向きに取り組み、東洋二部に合格した。

5 呪縛の男子

A商の男子の中には学力や学習への構え、生活や行動と関係なく、「いまだき、男は大学進学」という価値観のなかで、呪縛的に進路が方向付けられる傾向の生徒がみられる。これらの男子生徒は、進路調査の早い段階から一貫して大学進学希望の意向を示すものの、そのための勉強や準備はしない。従来、進路多様校のこのような男子たちは具体的な志望校が決定しないまま卒業したり、準備なしに一般受験して不合格になったりし、進路未定者やフリーターとなっていた。

本プロジェクトでは、昨年度までは男子の参加が少数であったが、本年度はより多くの男子生徒が活動に参加してきた。男子が多く参加した要因としては、本年度の男子は20名あまりで、大きく2つのグループに分かれていたことによる。グループの一方はサッカー部員とその友人で構成され、部の顧問の女性教諭が熱心に進学を勧めた結果、グループ内で進学傾向が高まり進路選択支援の活動にも数名が参加した。もう一方のグループはほぼ同一クラス内のグループで、担任も含め特にかかわった教師がいなかったために、様々な進路選択をおこなうとともに未定率も相対的に高くなった。

ここでは前者のグループに属する2名を事例として取り上げる。

(ケース5) マコト

マコトはA商から徒歩15分の高層都営住宅に家族5人で住み3人兄弟の長男、小中学校ともに地元である。小学校からカブスカウト、中学でボーイスカウトと活動しボランティア経験や異年齢集団との交流経験が豊富である。

中学卒業後、一度、他の高校に入学するが怠学により1年生の途中で中途退学し、A商には1年遅れで過年度生として入学している。3年間めんどろみ担任はマコトを評して、「あいつはとにかくめんどろくさがり、なまけ者なんですよ。頭だつて悪くはないのに努力しない、朝は起きられない、授業にあきたら帰っちゃう、要するに我慢するのができない。だから、中学のときの友達なんかにもばかにされてるんですよ。」と述べている。

進路指導部がおこなった進路志望調査ではマコ

トは、一貫して大学進学を希望している。その理由について進路指導部の進学担当者には、「おれ、(ボーイ)スカウトの友達とか先輩とかみんな大学行ってるんですね。それでやっぱり自分もいくなら大学。で商業だから商学部かなって…」と語っている。

実際の進路選択の過程については、卒業までの1年間マコトは、進路決定に向けて、ほぼ学期毎に決意→挫折→反省→決意というサイクルを繰り返してきた。そしてそのことを進路指導部の進学担当、支援の大学生・院生に、何度も表明している。4月の新学期当初には、進路指導部の担当者に対して「先生、おれ今日まで(3日間)遅刻してないんだ。この調子で頑張るから、今度はすごいやる気あるから、たのむよ。」と話していたが、翌週から遅刻がはじまり6月の終わりには学期欠時オーバーとなり、卒業見込みの調査書の発行が保留されることとなった。担任に、「おれ2学期から頑張るから、みててよ先生。」と表明して夏休みに入り、夏休み中は、5回指導に参加したが、大学生が書く内容などを指示しても自分なりの構成に固執したり、勝手に「じゃあ家でやってきます」などと言っては、おしゃべりに夢中になっていた。また、友人と支援の大学院生をキャンプに誘うなど受験生の決意はまったく感じられない言動や行動もみられ、休み前の決意との一貫性がまったくみられなかった。

2学期も1学期の繰り返しで、10月早々に再び欠時オーバーが出て、年明けまで調査書の発行ができないこととなり、推薦入試には出願できないことが決定的になった。したがって10月以降は学習支援活動の場にはたまに顔を出すものの、やや居づらそうにおしゃべりをして帰るような状態であった。

年が明けて2月に何とか卒業が決まると、進学ではなく就職試験を受けることとなった。保護者の経済状態を危惧して、夜間に通学できる就職先を探したのだった。しかし、結果は不合格。ここで「もうフリーターでいい」という語りもでたが、担任の勧めもあり2部の大学を受験し、受かれば昼間バイトするという事となった。この間は活動の場に顔は出すものの活動にはほとんど参加しなかったが、試験直前に面接練習をおこなった。結果は合格で、現在は大学の2部に通いながら夜中に居酒屋の厨房のバイトをおこなっている。

(ケース6) ユウスケ

ユウスケは、家が呉服問屋を営む自営業で、私立高校から駒沢大学に進んだ兄との二人兄弟。両親としては、高校受験は失敗したが兄と同様、大学進学してもらうことを望んでおり、6月時点か

ら進路希望調査では大学を希望していた。

しかし、夏休みに入るまで具体的にどの大学をどのような受験方法でなどとは考えていなかった。そのことを心配した担任が電話で学校に呼び出して、進路担当者の方から高千穂大学のAO入試の起業・事業経営コースで受験することを勧められ、「おれ別に家は継ぐ気ないんです」というのを、とりあえず入学の手段だからと説明され、「わかりました。じゃあそれでいいです。」と志望校が決定した。

この入試は、家業を継ぐ意志のある者が受験資格の1つであり、志望理由書・保護者の同意書、作文のほか面接が課せられる。ユウスケは夏休み中に学校見学、志望理由書の提出をおこないAO入試のエントリーを済ませたが、9月からの週2回の活動には試験の直前まで、教員が参加を促しても積極的に参加することはなかった。

ようやく試験の2週間ほど前になり、活動に参加するようになったものの、数回の指導で本番の試験を迎えることとなった。準備できたのは、志望動機の作文練習と基本的な面接対策だけであったが、本人は至って楽観的で、教員の「準備は大丈夫かい？」の問いに「ばっちりだから！」との返事が返ってきていた。

しかし、試験終了後、報告に来たユウスケは、「面接で髪型を注意されてショックだった。なんで教えてくれなかったんだ？」と訴えた。実際はそれらの注意は事前に再三にわたり、大学生、教員からされていたが、それに対してユウスケは「楽勝だからまかせて」「わかってるから」などと答えるものの真剣には捉えていなかった。面接で指摘を受けた髪形についても、床屋に行くように大学生・教員で説得させて行かせたものの見た目はほとんど変わらないような有様で、大学には入りたいがそのために自分が努力することや我慢することが、一般的な考え方としては理解できても自分の行動としてはできないのであった。

それでも結果は合格、本人は大喜びで「あんな(髪形の)こと言われて、絶対だめだとおもったけど、よかった!(入学したら)がんばるから！」と大学生や教員に言ってまわっていた。

6 進路多様校における進路選択の性差

4節での転機を乗り越えるチャレンジャーとしての女子と5節で指摘している積極的な転機のない呪縛の男子という差異はどのような構造であるか検討する。

3年の6月時点での男女の未定者率と卒業時のそれとを比較すると、女子の方が3年になった時点で未定であっても最終的に進路選択をおこなう

割合が高いことがわかる。

また、男女の間でさらに特徴的な現象としては、女子の未定者は就職にも進学にも進路を決めているのに対して、男子の未定者は進学に変わることはあっても就職になることはせいぜい1学期中に数例あるだけで2学期以降は稀であったという点である。

つまり、未定の女子は様々な内外の要因の中で悩みながらも、就職と進学を比較しながら選択することが可能であるが、未定の男子のうち、特に進学したいが学力や経済的に困難であると思っっている場合、それでは就職をとという選択肢をとらずにフリーターに移行してしまう例が少なくない。

進路選択支援の活動のなかでもその傾向が見られる。昨年の報告で指摘したように女子は、就職か進学かと大きくゆらぎながら進路を決めているのに対して、男子は進学という希望をいだきながらも、その実現に向けてのプロセスをなかなか歩めないでいるといえる。

つまり、男子においてはユウスケのように親から大学に行けと言われ、本人もなんとなくそうだと思いながらも、そのための大学選びからして何をどうしてよいのかわからないというような事例や、マコトのように大学進学を決意しながらも、そのためにやらなければならないことができないという事例などでも保護者は大学進学を容認している。もし、女子がそのような状態なら保護者のまなざしは厳しく進学など許さないように考えられるし、また、女子自身がこんないい加減な気持ちでは大学には行けないと自己規制してしまうことも多い。端的にいえば、男子は保護者に経済力があればなんとなくといった気持ちでも進学できるが、女子は明確な目的がなければ自他ともに進学が許されないということになる。

以上のような分析から、進路多様校の女子においては、中堅校から進学校で中西が指摘するジェンダートラックの存在や、女子学生や女性専門職において神田ほかが指摘した1番を譲るといった折り合いをつける行動とは異なった進路選択メカニズムがあることが考えられた。

7 女子生徒の「アイデンティティ問題」と進路選択

A商業高校の生徒の進路選択を見ていく中で浮かび上がるのは、進路多様校でも性による周囲の期待度が明確に異なっているという事実である。

「ジェンダーと教育」に関する先行研究でも、この点は学校文化のジェンダー・メッセージや親の期待度の相違として問題にしてきた。

だが、そうしたメッセージを受ける中で、あえ

て進学を目指そうとする本プロジェクトの女子と男子とで大きく異なるのは「存在証明課題」を有するかどうかという点であろう。石川が指摘するように、人は人生の節目において、自分は誰であるのかというアイデンティティを証明しなければならない。また、自分の価値を剥奪される傾向の強い人々＝差別される人々は、自分の価値を守ろうとして存在証明に躍起になる。石川(1992)はこうして存在証明に人をくくりつける構造的な問題を「アイデンティティ問題」と呼ぶが、進路多様校における女子生徒の進路選択は、まさにこうしたアイデンティティ問題の1つである。大学に行っても仕方がないと言われてしまう進路多様校の女子生徒にとっては、大学進学を目的を他者と自己に対して提示することは、自己のアイデンティティ問題の課題の1つとなっている。A商業高校での進路選択過程において女子だけに転機が存在するのは、こうしたアイデンティティ問題を女子は強く課せられているからであろう。

「ジェンダーと教育」の先行研究に照らした場合、本報告が提示したのは、被差別差者としての女性のアイデンティティ問題が、進路選択を大きく規定しているという問題である。中西が整理しているように、高校生の進路選択におけるジェンダーと教育の関係を説明する際には、学校内部効果による社会化とチャーターによる社会化作用が指摘されてきた。しかし、本報告で見えてきたのは、女子生徒へのメッセージは、役割期待というよりはアイデンティティ問題を生じさせるような価値剥奪のメッセージとして機能しており、それに対する対応として、大学進学に明確な目的が付与されて選択されるケースがあるという事実である。

行為者の主体性を重視する視点は、ウィリスらの抵抗理論の流れを汲む研究とも関心を部分的に共有するものの、本報告はむしろジェンダーメッセージに反発し、支援を通じて大学進学を果たしていく生徒を考察の対象にした点で異なっている。この点を含めて、より詳細なデータの紹介と理論的考察は当日の報告にて行う予定である。

(文責：1,2,7 酒井 / 3,5,6 千葉 / 4(ケース1 広崎), (ケース2 齋藤・広崎))